

APPENDIX

RECENT HISTORY OF THE OMAHA TRIBE

CONTACT WITH THE SHITE RACE

オマハ族が最初に白人と接触するようになったときは、厳密に定めることは出来ないが、しかし、17 世紀の中ごろ、フランス人とたまたま遭遇した時あたりまで会合は持たれていなかったであろう。オマハ族とフランス人との間での通商は、決して密接だったり、長いものではないばかりか、フランス人の側から、インディアン達の風習を乱したり、あるいは、インディアン達の土地を所有しようとするようないかなる企てもその形跡を残していなかった。冒険心であるとか、商取引をしたいと言う希望が最初にインディアン達の住んでいる地域に迷い込んできた来た人たちを駆り立てた。彼らが滞在の間、彼らは、友好的な態度で付き合っていたし、また、主として、白人たちの産業の製品を原住民たちの間に紹介したり、末長く安定した取引関係を確立することに専念していた。一方、イギリス人は、最初から植民地の支配者として、土地の所有者になることを目的としていた。インディアンは手に入れ住んでいる場所から退くために、どこにでも家を見つけることが出来るといつも考えて、ある種の買収という形で確保したいと考えていたが、これがしばしば、諍いをおこし、原住民たちに苦難を強いてきたという思い込みであった。オマハ族とフランス人との関係とオマハ族とイギリス人との関係の違いは、これらの二つの国に対して与えた名前に繁栄されている。フランス人は、*Wa'xe ukethiⁿ* と呼ばれていた; *wa'xe* のそれらしき語源は既に与えられている (p.82) ; *ukethiⁿ*、"通常の、" "珍しくない、" あるいは、"共通ではない" — これらの白人達は人々と交わりをもち。そして。自分たち自身をよそ者と考えていなかったと意味している言葉だ。イギリス人は、*Moⁿhiⁿ toⁿga* (*moⁿhiⁿ*, "ナイフ;" *toⁿga*, "大きな"); と呼ばれていた。イギリス人に与えられた、**Big Knife** (大きなナイフ) という名前について、オマハ族の老人は、部族の中で生まれたのではなく、オマハ族が他の部族のものを借用していたと言っていた。イギリス人は、ウィネバゴ族、アイオア族、オト族、オサゲ族、そして、ポンカ族にもこの名前で知られており、これらの部族は全て言語学的にはオマハ族と同類の部族であった。アメリカ人に対してダコタ族のつけた名前、**Long Knife** は、イギリス人に対しての古い言葉を変形したものであるというのもまんざら間違いでもない。**Big Knife** という名前がイギリス人により身につけられていた刀に基づいて使われるようになったといわれている。刀に対する現在のオマハ族の言葉、*moⁿçe wetiⁿ* (*moⁿçe*, "金属の;" *wetiⁿ*, "戦闘の棍棒") はオマハ族がその独特な使い方を学んだ刀に対して与えられたものであった。

フランス人とイギリス人は、オマハ族が直接に関係を持った、唯一の白人の国の人たちだった。彼らは、スペイン人についても知っていたが、彼らは、*Hespayu'na* という言葉の崩れた形で呼ばれていた。オマハ族は、ドイツ人、スウェーデン人、イタリア人、そして、アイルランド人をまとめて、*Ie'thashathu* (*ie'*, “話す;” *thashathu*, “ガラガラと” あるいは、“混乱した”) と呼び、一つの国の人と考えていた。黒人たちは、*Wa'xeçabe* (*waxe*, “白人;” *çabe*, “黒い”) — “黒い白人” と呼ばれている。

初めの頃の取引商人たち

17 世紀の中ごろまでに、フランス人は五大湖の以西まで繰り出して、冒険家たちの足跡に沿って交易所が次々に設置された。フランスはオマハ族との取引をするようになり、18 世紀の後半までイギリスとアメリカにとって代わられるようなことはなかった。前世紀の老人たちは、“ずっと北の湖にある” 交易所で取引をするために長い旅をしていた時の父親たちが話をしていた物語を思いだしていた。多分、これは、Carver により話されていた、ウィニペグ湖にあった “La Reine 砦” の交易所のことであった。“ここに、” と彼が書いている。“250 マイルほど南にある場所に住んでいた Mahahs の人たちが取引をしにやってきた。”^a オマハ族がミズーリ川にあった最初の交易所、これはその河口から 250 マイルほど上流にあり、1722 年に設立されオルレアン砦として知られていたが、このことを知っていなかったわけではない；この砦は、白人の取引商たちがオマハ族の領域に入ってくる足掛かりとなった。沢山のインディアンの部族が戦いの最前線のゲリラ部隊として巻き込まれた 18 世紀の中ごろのフランスとイギリスの間の戦の間、オマハ族はこの戦いの場所から遠く離れていて、その渦中から逃れることができたのは幸運であった。事実、フランスとイギリスとの戦闘の間だけでなく、イギリスと植民地主義者との間の戦いの間も、オマハ族はこれに関与せずにしたので、部族はいかなる白人たちに対しても決して武器を取ることはなかった。オマハ族がこうした困難さを明確にしていたけれども、彼らは白人たちとの接触にありがちな悪質な影響を逃れることが出来なかった。そうしたものの多くは、毛皮交易会社間で勃発した競争を通して次々と出てきたものであった。

1763 年にフランスとインディアンとの戦争が終結すると、イギリスはミシシッピー川の東まで、全ての支配するようになり、次第にイギリスの取引商達が、それまでフランスが独占的に支配していた領域にまで、西へ西へと進出してきた。このイギリス人のオマハ族の領域に対しての極身近な接近は、直ぐに、ルイジアナ買収の後急速に進展して行った彼

a Jonathan Carver, 69, Philadelphia, 1796 *Three Years' Travels through the Interior Parts of North America*, 等

らの領域がアメリカ合衆国の支配下になっていくその路線を感じさせた—アメリカ人商人の国際的な苦難から解放するという効果があった—、そして、結果として、交易所がミシシッピー川からミズーリ川に沿って、セントルイスを本拠地にして急速に広がっていった。オマハ族に隣接した近辺には重要な交易所は設立されなかったが、18世紀の最後の世代の間に毛皮取引会社に雇用されている人達がやって来て、彼らと取引関係を開始した。82 ページで述べたような、**Black bird**の話は、こうした接触の記録である。19世紀の最初の四半世紀の間に小さな交易所がオマハ族の村の近くに開設され、一時使われていた。夫々の部族の間のアメリカ合衆国政府の機関が出来る以前、取引商の間の通常のしきたりは、小さな丸太小屋を建てて、そして、取引商の訪問の時間をつくるので、かれは、部族が毎年恒例の狩から戻ってとき、あるいは、特別な狩の集団が、独自に毛皮を求めてでかけ、狩で獲得した成果を携えて戻ってきたときなどは。彼の品物で、良い商売をしていた。オマハ族には、誰もが取引会社と接触するような、こうした時以外の時間はなかった。

鉄製の道具の導入

最初から原住民たちの産業は、白人たちの産業の製品を持ち込んできた取引商人たちの到来の刺激を受けていた。それは、金属製のナイフが、尖った石の原住民たちの道具に置き代わったときより、それほど前のことではなかった。金属製のナイフが早い時期の取引商により最初に持ち込まれたときには、オマハ族には、一本が一ドル程度の価値のものであった。儀式などで、役に立つ道具の最初のころのものについての会話の興味ある例が、入れ墨の儀式のとき (p.503) に必要な贈り物の一つは、部族の間で知られていた名ばかりの強くて、赤い柄のある沢山のナイフであるという必要性の中で見出される。金属製のナイフが直ぐに、あらゆる家庭内の目的に役に立つようなものとして、男にも女にも常に道具一式のものとしてみなされるようになったが、部族の儀式の中で、古くから使われてるいる尖った石のナイフの代役をするようなものではなかった。男の子が雷に対して捧げられるとき (p.122) に頭の毛から、髪の毛の塊を切り取られるときには、尖った石のナイフが使われていた；必ず尖った石のナイフだけが、治療の目的で血を出すときに使われていた。古い名前 (*mo'hin*) が石製のものから金属製のナイフになっても代わることなしに引き継がれた。石の斧についての名前 (*mo'cepe*) が、同じように金属製の斧に引き継がれた；“くわ”に対して *we'e* は、すきに対して後に与えられたものであった。速かれ遅かれ、全ての石の道具が鉄製のものになり、石の小片が消え去る工作物となった。ある一つの生き残ったものが最近の世紀にまでよく使われ、言い換えれば、石盤 (*i'thapa*)、これは、トウモロコシの穀粒をおもゆの食事の粉にするために使われていたが、その製作と使用ために使われていた。人々が旅行をする時にはこうした石盤が“手でつかう臼”として携帯され、使われていた。骨製の突きざりが、インディアンはいつも骨の柄に使用していたがこれが鉄製のものに代わった行った；古い名前、*wa'ku* は残っていた。鉄製の刃は、

なめし用に毛皮を用意するための使われ方を容易にするためのエルクの角のかきむしり器の先端に結び付けられていた。鉄製のくわがエルクの肩の骨の刃から作られていた古い道具にとって代わった。日常の生活での人々が必要性を感じていた関連する石の道具が、まず最初に鉄製のものに代替された。

古い時代の職業の衰微と人々に対する影響

取引商が入り込んできたことと鉄製の道具の導入、そして、日常生活のながてのその他の工作物とともに、あたらしい状況にインディアンが直面するようになった；彼らはもはや使用のために必要な工作物全てを作らなくてもよくなり、以前で在れば、石を削ったり磨いたりする長く、手間のかかる工程で煩わされていた時間が、いまや必要ではなくなった。さらに、古い時代の産業で技能を修得するための刺激が消えてしまった。状況のこの変化をもたらした鉄製の道具は、毛皮との物々交換で手にしていた。人々にとってはこの物々交換は新しいものではなかった。沢山の部族の間で古くからやっていた方法であった；鉱石、種、貝、そして、その他の工芸品が、この方法でそれぞれの経路により、その産地からずっと離れた地域に持ち込まれたが、白人たちが来るようになった時代、まだ、オマハ族が単に商売の目的で動物たちを殺してはいなかったというのは、必ずしも正確ではない。従って、取引商により確立された毛皮の物々交換は、部族間の間で行なわれていたようないかなる物々交換とは、性格的に違っており、インディアン達の間で新しい産業—収穫を目的とした狩、を促すことが運命付けられていた。従来の狩は食料や、その他必要なもの—衣類、住居、そして道具を作るための骨など、こうしたものを得るために行なわれていた；さらに、多かれ少なかれ、それは、宗教的な儀式を伴って指導されていた。その儀式は、毎年恒例のバッファローの狩（p.275 参照）やトウモロコシを植えたりすること（p.262 参照）と結びついた儀式の中で示されているように、生活を維持するための手段を与えるものとしての、Wakon'da にたいして、オマハ族の考えを指図しているものである。利益を上げるため狩猟の探求が狩に対する新しい動因を持ち込め、大地を採掘することも然り、動因は古い宗教的な考えや習慣とはかけ離れていた；その結果として、このような影響の下でそうした習慣はゆっくりと、しかしながら、当然のことながら使われなくなっていった。そうしたものの抹消のオマハ族の気持ちに対する効果は、古い信仰の力を弱めていったに違いないし、また、新しい商業的な性格を持った規範を導入して行った；結果として、オマハ族は、白人たちとより密接に接触することに伴い入ってきた新しい、これまでとは逆の影響が侵害してくることにに対する抵抗力を弱めてしまった。

狩に対して与えられた新しい性格が単に人々の考え方だけでなく、彼らの持っているずっと以前からの生活の行動形態に対しても、恒久的な影響をもたらした。古い村の生活の影響を弱めた職業としての狩に対する発奮が、それまでは違った富の基準を創出し、狩の重要性をますます大きくし、そして、市場に出すための毛皮や皮を作る女たちの仕事を著

しく増大させた。ここに、オマハ族の間に複婚の現実となった継続してつけられた名前の状況とみなすいい理由がある。部族の中には、特化された労働に専念する集団はなく、ましてや、雇用された形の労働者もいなかった。古い時代には、一人の女は、上手な狩人により手に入れられた全ての皮に対して、殆ど、適当な配慮を与えるようなことはなかった；いまもなお、部族の圧力により引き起こされるような付随的な仕事をするようなことはあまりなかった。

装飾と飾りにおける変化

取引商たちの売り物は道具に限られてはいなかった。人々の目をひく沢山の目新しいものが持ち込まれ、新しい欲望を作り上げていった。きらきらと輝くガラスのビーズは、貝のビーズでは実現が出来なかったずっと複雑な装飾に人々の気持ちを引いたが、しかし、ビーズの装飾は直ぐにはヤマアラシの棘の刺繍と置き換わることはなかった。この刺繍には、技能、そして、忍耐が必要だったが、これに対しビーズは簡単に扱うことが出来たし、ちょっとした努力で効果的に装飾や色づけの飾りをつけることが出来た。従って、時代とともに彼らの使用が一般的になった。貝のビーズに使われていた (*hiñka*) という古い名前が、新しいガラスのビーズに使われるようになった。銀製の腕輪や 指輪は、オマハ族にたいしては、他の部族のようにあまり好かれなかった。取引商たちにより持ち込まれた銀製の“耳飾”は *pe'ugashke* (*pe*, 鼻を意味する *pa* から、快い響きとなるように変形されたもの、*ugashke*, “取り付ける”) この名前は、オマハ族には鼻の輪を付けるという伝統がなかったので、入れ墨の儀式をする間、儀式的に鼻に穴をかける (p.503) ことに困っていたのであろう。“イヤリング”の名前は、*u'wĩ* であり、言うことが珍しいこの古い言葉は、取引商たちが持ち込んだ銀製の“耳飾”には決して使われなかった。こうした耳飾はイヤリングのように大変好まれた；時には、彼らは、耳たぶ全体を飾りたてていた。

古来のやり方と比較した時に労働力を減らす別の方法が取引商から塗料を買うやり方であった。塗料はほころびで繕う針の紙袋ほどもないずっと小さな包みで売られていて、先の世紀でのこれらの包みの一つの値段は 25 セントもしていた。“赤い塗料”の古い呼び名、*wazhide* (*waçe*, “粘土；” *zhide*, “赤い”) は、取引商たちが“緑色の塗料” (*waçh'tu*) について呼んでいた古い名前からきていた。青い塗料は、*moñthĩkatu* (*moñthĩka*, “大地；” *tu*, “青い”) と呼ばれていた；黄色い塗料は、*moñthĩka çĩ*, “黄色い大地” — これらは共に古い名前であった。非常に多量の塗料が売られていたが、この商品だけで、取引商たちは多大な利益を手にしていて、18 世紀の終わりごろになって、きめの粗い木綿布と呼ばれた重い木綿の布が多分イギリスの取引商により持ち込まれた。先の世紀の中ごろのこの価格は、オマハ族にはヤード当り 4 から 6 ドルくらいで売られていた。オマハ族がきめの粗い木綿布を最初に見たときには、かれは布と言うものに関する知識が全くなく、

だから、それが彼らの前に広げられたときには、彼らは、布を *qai'zhide*, “毛布”と呼んで、皮で出来た毛布として、彼らが見たその布の表面の大きく広げられたものに名前を付けていた。しかしながら、彼が布について話をしたいと考えたときには、彼は、色を付けた言葉を付け加えていた；こうして、*wai'tu*, “青い布、”あるいは *wai'zhide*, “赤い布、”一方、簡単な言葉の *wai'* そのものは、以前として皮の毛布を意味していた。広幅の布は *wai'sh'aha* (*wain'*, “毛布；” *sh'aha*, “滑らかな”)と呼ばれていた。これは、その表面が、きめの粗い木綿布との違いからくるものであった。

きめの粗い木綿布は男達のレギング、腰布、そして、ときにより毛布にも使われていた。女たちはこれで、スカートや袋、そして膝まで伸ばしただけのレギングを作っていた。腰布は男達にだけ使われるものではなかった；このものは部族の中の裕福なものたちにより、女たちのスカートやレギングのために買われていた。きめの粗い木綿布と広幅の布が入って来て、針や糸も知られるようになった。針は、*wa'kuzhi'gau'ude* (*wa'ku*, “突き錐；” *zhi'ga*, “小さな；” *u'de*, “穴のついた”)と呼ばれた。糸は、“紡いだもの”というものの意味の *wahon'*という名前が付けられていた。ピンは先の世紀に入るまでよく知られていなかった。それが入って来たのは、アメリカの商人たちによりキャラコが持ち込まれた19世紀の中ごろであった；非常に鋭い針先出あったので、人々に普通に使われるようになったのは間もなくであった。それは、*waxi'ha*, “薄い皮”と呼ばれた。着物として毛皮につけられていた価値は、普段身につけるものとしては非常に高く、衣服用にきめの粗い木綿布をその代わりに使うということが盛んに進められいたというのは事実であった；後になり、このきめの粗い木綿布の高い値段がキャラコの販売量を増大させた。

ビーバーを捕獲する道具に使われた金属製の仕掛けが、早い時期に取引商により持ち込まれた；これらは、*mo'ce*, “金属”と呼ばれた。余りはっきりと意味の分からない言葉の *mo'ce* が“わな”として使われ、わなを仕掛けることは *mo'ceuzhi* “金属製のものの中に嵌める、あるいは、置く”と呼ばれた。オマハ族により供給されていた毛皮は、バッファロー、熊、ビーバー、ミンク、アライグマ、ならびに、鹿の皮が基本であった。人々は、上手な狩人、畏師であり、いい取引をする望ましい部族とみなされていた。バッファローの皮のテントに代わるような厚地の丈夫な布が、先の世紀の中ごろには当たり前になり、テントカバーの古い名前、*ti'ha*, “テントの皮”がつけられた。

鉄砲は、*wahu'to'the*, “これで音を立てる”という名前で、19世紀の前半四半期の終わりのころに入って来た。玉は、*mo'cemo'*, “金属製の矢”と呼ばれ、弾薬は、*mo'xu'de*, “灰”と呼ばれた。オマハ族が最初に手に入れた鉄砲は、火打ち石銃であった；ライフル銃は、先の世紀の第3四半期か第4四半期まで手に入らなかった。銃の使用により、それまでの原住民たちの仕事であった、矢作りがなくなり、そして、若い者達に対する古い教えのいくつかは意味のないものになった。(p.331 参照) 銅製のやかんや鍋、そして、鉄製の調理具が、元来の容器に代わり、やがて、この容器作りの産業が消えてなくなった。木製の容器やコップが家族内での使用から次第に消えて行きたが、前者のものは、神聖なる部族

の行事、その他の神聖な性格のある儀式の中で何とか残ることとなった。

貨幣の導入　：　毛皮の価値

オマハ族がアメリカ合衆国政府との取引をした以前には、仮にあったとしても、部族により貨幣というものをほとんど見られることはなかった。取引商との物々交換で使われていた毛皮の最も小さな価値はアライグマの毛皮で 25 セント程度の比率であった。*Mika'ha ithawa* (*mika'ha*, “アライグマの毛皮；” *ithawa*, “の価値がある”) は、1 ドルの四分の一と呼ばれるようになった。1 ドルは、*wi' bthu'ga* (*wi'*, “一つの；” *bthu'ga*, “全体” もしくは “単位”) と呼ばれた； 50 セントは、*mo'con'thi'ha*, “半分” 1 ダイムは *shuga'zhi'ga* (*shuga*, “厚い；” *zhi'ga*, “少し” — “少しばかり厚い”) で合った。

銀の半ダイムは *bthe'kazhi'ga* (*bthe'ka*, “薄い” *zhi'ga*, “少し” — “少しばかり薄い”)；ニッケル (5 セント) は、*we'thawapa'ton* (*wethawa*, “価値のあるもの；” *ca'ton*, “5”)；銅貨は、*we'thawazhide*, “赤い価値のあるもの；”、75 セントは、*mika'haithawa tha'bthin* (*tha'bthin*, “3”) で、三枚のアライグマの毛皮の価値があった。3 千ドルは、*ku'ge win* (*ku'ge*, “箱；” *win*, “1”) と呼ばれ、これは、運ぶのに便利のように小さな箱にドル銀貨を入れる習慣からきたものであった。合衆国政府の機関によりインディアン達に支払われる場合 1,000 という数に対しては、*gthe'bo'hiwi'ton'ga* (*gthe'bo'*, “10” *hiwi'*, “一つの方向に進むこと；” *ton'ga*, “大きい”) であった。先の世紀の中頃に、名前のついた毛皮に付けられていた価値は次のようなものだった：バッファロー、\$15~\$20；カワウソ、\$12~\$15；ミンク、\$2~\$5；ビーバー、\$4~\$6 であった。ビーバーは非常に沢山居て、罟の使用で簡単に捕獲することが出来たので、有能の狩人たちは忍耐と労力がより必要な大物の狩をしなくなり、彼らの狙いはビーバーの確保に移っていったが、こうしたことから、毛皮に良い値段がつくようなものの狩が出来るものは、同時に、彼らの家族に沢山の肉をもたらしていた。相対的に極僅かであるが、毛皮の取引が現金で行なわれていた。物々交換という基準の取引が、毛皮を供給する動物の消失が古い時代の取引商の仕事をなくしてしまうまで続いていた。毛皮の取引業者の間の競合が部族の間に毛皮と取引を確保するという目的で酔っていい気持ちにさせる液体の導入にみちびいて行った。そのため、部族同士の間で様々な争いが起こるようになり、年老いた酋長やその他の部族の指導者たちからの訴えが深刻であったので、ジェファースン大統領は、対策として、1802 年に議会に対する教書、これは懲罰をとまなうインディアンに対する販売の禁止条例であり、承認されたが、これを提案した。議会の条例に関する知識は、この時代、非常にのんびりしていて、法律はまばらに入植していった地域での施行が困難であった；引き続き毛皮の取引は継続して推められており、原住民たちは取引商から供給される陶酔させる液体によりますます風紀を乱していった。この法律破りのやり方により与えられた悪癖は合衆国の中の部族からは、未だに取り除かれていない。“火酒” と言うのが、はなはだしく異なった言語の陶酔させるものの

共通の言葉であるべきと言うのは、まことに奇妙なことである。オマハ族の言葉では、*pede'ni*、文字の意味は、“火酒” (*pede*, (火;) *ni*, “水”) である。

オマハ族は、酒のひどい害を避けることが出来なかった。取引商たちは、人々にラム酒をしつこく勧めた；物々交換で扱う品物よりもずっと安く、交易は不法ではあったが、会社にもたらす収益は、あまりにも大きく、彼らの代理人達は、見破られることの機会を掴むことを教育されていて；かれらがそのようにしたので、一般的には不幸にも、露見を免れることが依然として続いた。

酒浸りとそれに対する懲罰

先に世紀の第三代世代には、今も語り継がれているオマハ族の中で事件が起きた；この事件は、訪問してくる取引商と彼の商品を受け入れるために立てられた小屋で起きた。

取引商者の代理人が彼の混血児、彼はその時 17 歳ほどの若者で、彼は事務員として働いていたが、彼らがその小屋に到着した。インディアン達が毛皮を持って集まり、そして、その支払いとして、商品と酒を受け取った。その後に、事務員が一人でその小屋に残った。二人の男が、彼らは多少酒に酔っていたが、小屋に入って来て喧嘩を始めた。三人目の男が 彼の小さな息子をつれて取引をするために小屋に入ってきたか、喧嘩をしている男達におびえて、彼らから遠ざかって居た。四人目の男が、彼は酒を持っていたが、小屋に入って来て、彼は面倒なことに巻き込まれ、喧嘩をしている者達は、かれをもっと煽り立てたように見えた。内気な男と彼の息子の様子を見ながら、彼は自分のナイフを取り出し、内気な男に向かって突進し、彼の喉元にその武器を突き刺した。その被害者が倒れると、酒で酔った男は、自分のしたことに気がつき、そして、急に酔いが覚めた。2 人の男は喧嘩を止め、殺した男だけを、そして、死人と若い混血の事務員だけを残してその場から逃げていった。事務員は、その罪を犯した男に木屋の中に留まるように言い聞かせた。それが、唯一、かれが安全である場所だったので、そして、暫くは彼は、この忠告をここに留めた；しかし、ついに彼は、大声で叫んだ：“私は自分の人生を台無しにしてしまった。私は、ここで、直ぐに死ぬ目にあうだろう！”。と言って、彼は夜の闇の中に出て行ってしまった。彼は、線の数歩行ったところで、矢を射たれ、間もなく死んでしまった。

この殺人者の恐怖とその事実が、若い事務員に、酒は人々から彼らの人間性と品格を奪い取ってしまうと気がつかせ、だから、彼に対し、もし仮に彼が部族の中である程度 of 力を持った地位に上ったとしたら、彼は、酒を呑む習慣をやめさせるような権威を行使すと神に誓いを立て、心に銘記するよう印象付けた。数年が経ち、この若い男、彼の名は、Joseph

La Flesche と言うが、彼は部族の中の重要な酋長のひとりとなった。彼は自分の肝に銘じたことに正直に、酒を飲んだ男たちは、鞭打ちの刑にするというお触れを出した。^a La Flesche 酋長が権威を持っていた間は、酒浸りが実際に検査されていた。不幸にも、秘密結社が出来上がった。そうした厳格な懲罰を与えるという酋長の権限が人々の道徳的な豊かさに興味を示さない人たちにより疑問視されるようになった。別の権威と言う物が引き合いに出され、最後には、酒は人々の間に密かに広まっていく道を見出した。しかしながら、この酋長の劇的な計らいは直ぐには忘れられることはなく、その効果が完全なくなってしまうまでには、後、数年が経過した。

取引商の政府による統制

君主が取引を統制したり、取引の免許を与えたりする権利を持っているイギリスの政策に従い、合衆国の条例はその権利を議会に託した。1786 年の条例では、インディアンが取引商は、アメリカ合衆国の市民でなければならなかった。1790 年の条例は、取引商を任命

a 勇敢だという評判では誰にも劣らない、素晴らしい男が誘惑に負け、そして、酔いつぶれた。彼は、酋長と大の仲良しで誰もが、酋長は彼に命令をくだしたりしないし、その男は部族の中で尊敬されていたと思っていたが、他の共通の襲撃者のように鞭打ちをされた。しかし、命令がなされ、懲罰を逃れるように命令された“兵士”は、彼らが、戦いで決して負けるような事のない襲撃者と戦わなければならないということがないかどうかことについて、どんな疑問もないと言うわけではなく、進んで、闘士のテントに進んで行った。闘士が彼のテントにおり；彼は、“その兵士”が近づいてくるのを聞き、彼らの使命を知った。彼は彼らと会うために外に出て行った。彼が姿を現すと、“兵士たち”は立ち止まった；彼らを見て、その男が言った：“あなたのやらなければならない仕事をしなさい。私は酋長の命令を破った。だから、懲罰を受けなければならないのだ。”彼は、正當に鞭打たれた；“兵士たち”の誰もが、鞭打ちをやわらげようとはしなかった。この闘士たちの行動の結果、彼のしくじりに対する男らしい認知のために、彼の部族の中における尊敬がより高くされるようになったばかりでなく、彼の行動は、酒びたりになることをやめさせたその酋長の努力により、酋長としての地位をより強いものにした。先の世紀の終わりの頃であったが、その彼が死ぬまでこの戦士は最も尊敬され、オマハ族のなかで影響力を持った人間の一人であった。

する活力を大統領、あるいは、彼により任命された事務官に帰属させた。ルイジアナの買収の効能により、オマハ族の領域が、合衆国の領域の一部となったときに、部族との取引が上述した法律により統制下に置かれるようになった。部族が“代理人システム”の統制を通過した後、在住の取引商達我、インディアン管理局から免許を発行された。こうした取引商たちが保護居留地に店を開店し、部族の取引を吸収していった。先の世紀の第七世代にバッファローの群が消え去ると、白人たちの入植が急速に進み、最終的には鉄道により地域の改札が進んで行き、こうしたこと全てが、狩の産業を終焉に追い込み、取引商の絶大な影響とビジネスを収束させ、人々の生活と職業に対する著しく、かつ継続的な効果を生み出していった。

新しい食料、ゲーム、そして、病気の導入

取引商たちにより持ち込まれた日常の道具、兵器、そして、衣料における大きな変化に加え、新しい食料が持ち込まれ、そして、ことあるごとにこうしたものが、人々の日常のものとなって行った。小麦粉が先の世紀の第二世代に知られるようになり、*wamu'cke* と呼ばれた。この名前は、小麦から作られたパンにも使われた。コーヒーはもっと前から知られていて、*mo'ko'çabe* “黒い薬” と呼ばれた。砂糖は *zho'ni* (*zho'n*, “木”; “*ni*, “水”), で、これは、明らかに“楓の砂糖”の名前から来ていた。大きな白いジャガイモに、原産ジャガイモの名前の *nu* が与えられていた。牛肉やその他の新鮮な肉は、昔からの名前の *tanu'ka*, “湿った肉” という言葉で呼ばれた。

二種類の新しいゲームが白人たちから持ち込まれたトランプゲームとチェッカーである。トランプゲームは *wathi'baba*, “手で繰り返し開いて示すもの” と呼ばれ、カードを混ぜ、分けながらすることから来た名前であった。組札は次のように呼ばれた：それぞれダイヤモンド *ke'pa* (“亀の頭”); ハート *ni'deawin* (“尻”); スペード *mo'hiç* (“矢先”); クラブは *t'a'zhi* 意味は“決して死なない” と呼ばれていたが、これは、決して枯れる事のない花にちなんだものだといわれていた。チェッカーは *wako' pamogthe* (*wako'*, “賭け事”; “*pa*, “頭”; “*mogthe*, “さげた” 一頭を下げて遊ぶこと) と話されていた。

新しい病気は、人々の間にそれに応じた形で見られた。天然痘 (*di'xe*) が、丁度 1800 年の前に大流行し、“元気だった部族が僅か 2・300 人までに減少した”。はしか (*di'xebtho'çe*, “小さな天然痘” は、これは殆ど宿命的なものであったが、未だ存在し、恐れられている。マラリア (*wa'xewakega*, “白人の病気”) は、白人と接触するようになり、環境が変わったことにちなんで付けられた名前のように思われる。

新しい言葉の導入

沢山の新しい言葉が、状況の変化に合わせて造り出された。つぎのような言葉が日常使

われた。

お店、w'thiwi^{nti}, ここで取引する

窓ガラス、we'ugo^{ba}, 光を入れて明るくする

煙突、ti^{huko}(ti, テント; ^{huko} 煙を吸引する古い名前)

テーブル、wa'thate, 食べるところ

椅子、a'gthiⁿ, 座るところ

ロッキングチェアー、a'gthiⁿkipiçaça, 自分で揺らす

はかり、we'thihoⁿ, これで持ち上げる

暖炉、moⁿçeunethe、火をおこす鉄製品

シャベル、pe'deeithiçe,, 火をおこす

ビン、pe'xe^{ha}, 瓢箪の容器の皮

塊、ine'nazhide, 赤く燃えた石

幌馬車、zhoⁿmonthiⁿ, 歩く木

馬、shoⁿge,

うし、te'çka、 白いバッファロー

にわとり、wazhiⁿgazhide, 赤い鳥

ぶた、ku'kuçi、

くつ、zhoⁿhiⁿbe, 木製のモカシン

ストッキング、hiⁿbegawiⁿxe (hiⁿbe, モカシン ; gawiⁿxe、足の周りに巻くこと)

普通にはモカシンの下の足の周りには編まれた草が巻かれた

ボタン、moⁿgeithagashka (moⁿge, 胸 ; ithagasha, 巻くもの)

指輪、nombeuthixtha (nombe, 手、または、指 ; uthixha, to tnrust in)

踏み鋤、toⁿ'deⁿonçe, これで大地を切る

干草用フォーク、xa'deithiçe, これで草をかき集める

刈り取り機、wamu'çkeinoⁿçe, これで麦を刈る

草刈機、xa'deinonçe, これで草を刈る

鋸、we'magixe, これで切る

製粉用粉挽き機、u'noⁿtube 粉を挽く

銀、moⁿçeçka, 白い金属 (“お金”にも使われた)

金、moⁿçeçkaçi, 黄色の白い金属

ボート、moⁿde'gioⁿ, とぶ船

時計、あるいは、柱時計、mi'idoⁿbe, 太陽を見ること

ゴム、gaçuçigem, 伸び縮みする皮

電信、moⁿçeiuçishtoⁿ, 横たわっている金属 (電信を受け取ったものが容易に信じられないことにちなんだもの)

郵便切手、iⁿdewathaçkabe, (iⁿde、顔 ; wathaçkabe, 貼り付けること)

鉄道汽車、e'wazhiⁿnoⁿga, 自動で走るもの
馬具、shoⁿgeweiⁿ, 馬に付ける運ぶためのもの
くつわ、moⁿçethahe, 噛み付かせる金属
合衆国大統領、Itigoⁿthaiuzhu (itigoⁿthai, お爺さん ; uzhu 第一の)
インディアン事項処理官 Itigoⁿthaizhiⁿga (thai, 誰かのための ; zhiⁿga, 小さな)
将軍 Nudoⁿhoⁿgauzhu, (nudoⁿhoⁿga, 戦闘の指揮官 ; uzhu, 第一の)
大佐、Nusoⁿhoⁿgazhiⁿga, (zhiⁿga, 小さな)
二等兵、theiⁿ, やかん運び人
銃剣、moⁿdehi, 槍
旗、haçka, (ha, 皮、çka, 白い) 部族の旗の使用から来ている名前
紙、waba'gtheçe, 線を作ること

読むこと、we'thadi (we, 行為 ; thade 話をする)
先生、waba'gtheçewethade, 紙を読む人
書くこと、waba'xu, マークを付けること
ペンと鉛筆、we'baxu, これで書くもの
学校、waba'gtheçeathaditi 紙、書くこと、家一紙を読む家
牧師、あるいは、聖職者、wagon'çe 見本を示す人
新聞、waba'gtheçegawa, 開かれた紙、紙を開くこと
写真、inde'ugaxe, 顔の絵
ミルク、te'çka monçeni (te'çka, うし ; moⁿçe, 乳房 ; ni, 水)
パンケーキ、wamu'çke btheka (wamu'çke, パン ; btheka, 薄い)
ケーキ、wamu'çke çkithi (çkithi, 甘い)
もも、she hiⁿ shkube (she, りんご ; hiⁿ、髪の毛 ; shkube, 深い、あるいは、厚い)
陶器、waçe'çoⁿuxpe, 粘土の皿
タンブラー (ガラス)、ni'ithatoⁿnoⁿxeegoⁿ, 水、飲むこと、お酒のように一半透明のお酒のような水を飲むこと
さじ、nib'cetehe, 金属製のバッファローの角 (古いバッファローの角で出来たスプーンの tehe にちなんている。)
フォーク、wa'kuwethate (wa'ku, つき錐 ; wethate, 食べるための一食べるための突き錐
ピン、wa'kuzhinga, ちいさにつき錐
石炭、noⁿxthe, 炭
ケロシン、noⁿxthe wegthi (wegthi, グリース)
大理石、inezhinga (ine, 石、zhinga, ちいさな)

いくつかの古い言葉が生き残っており、これが、*Tinpe*, “私は訪問しようと考えている” (ti, テント ; upe, 這ってその中に行く) ; この言葉は、テントの小さく開けられたところから入っていくときに前かがみにしなければならない格好にちなんでいる。たとえ、十分な大きな住居に入るときにも、オマハ族は、彼の先祖たちがしたように、*Tinpe* 言っていたのだろう。

アメリカ合衆国との協約

1815 年の 7 月に *Sioux* の *Portage* で合衆国とオマハ族との間の協定が結ばれた。(U. S. Stat. at Large, vol. VII. p. 129) 同様な協定が、1812 年の戦争に間、多かれ少なかれイギリス人取引商たちの影響下にあった他の多くの部族との間でも結れた。この協定の目的は、“全ての事柄におけるあらゆる出来事を合衆国とイギリス本国との間の最近の戦争以前と同じ基盤の上におく。” というものであった。侵害行為は、“お互いに容赦される”、“平和が維持される、” そして。部族により、合衆国は彼らの保護者の力であると認められるべきであった。

合衆国政府が天然痘に対して最初の対策を講じたのは、だいたいこの協定が結ばれた頃であった。オマハ族はワクチン接種の処理をすることを説得され、1837 年に、北の地方にいた多くの部族が、これにより殆ど壊滅してしまったときに、この協定が部族を病気の蔓延から救うのに効をそうしたのだろう。

二番目の協定が 1825 年にカウンスル ブラフで結ばれた (U.S.Stat.at Large, vol. VII, p. 282); これは、違反を犯したものに対する懲罰に合衆国の主権を与えることと取引商人たちを守ることに、主として関係していた。オマハ族は敵意のある部族には、武器をあてがわれないことに同意した。この二つの協約の中で、オマハ族は“*Msha*” 族と言う名前のもとで取り扱われているが、これは、白人たちの一部が、原住民の話し方が、*Omaha* の最初の文字を *u* のように軽く発音し、と同時に、強調を二番目の音節にしているのを誤解していることによるものである。

プレーリー・ドゥ・チェインで結ばれた 1830 年の 7 月の協定 (U. S. Stat. at Large, vol. VII. p. 328) で、オマハ族は、ソークアンドフォクス、スー族の一族、アイオア族、オト族、そして、ミズーリ 族と共に合衆国に対して、現在のアイオア州にある土地の所有についての主張を譲渡した。オマハ族、アイオア族、オトー、ヤンクトン、そして、サンテ・スー族は、現在のネブラスカのネマハ郡の保護居留地に、彼らの混血児たちは、夫々の個人当たり、640 エーカーの土地が分譲されることに同意した。オマハ族の混血児たちは全て、この保護居留地の彼らの割当てられた土地を確保できた。彼らの多くは、部族を去り、そして、自分たちの新しい割当てられた土地に住み移って行った ; 彼らの中には、土地を受け入れたが、その土地を放棄し、どうしても部族を離れようとしなかったものも居た。この協定の元でオマハ族は、アメリカ合衆国から土地を割譲したことに對し始めてその支払いを

受け取り、鍛冶と、そして、農業をするための道具が約束された—この約束は完全に実行されるまでには、それから数年が経った。インディアン部族の西部監督署の本部はセント・ルイスであった。この時点で使用が許された土地、その多くは彼らの住んでいる村が含まれていたが、その割当てられていたいくつかの部族を保護する立場にあった管理局は、役人であると彼らに説明された。

この協定（1830 年）の時点で、オマハ族は、現在のネブラスカのダコタ郡にあるホマーの町の近くの彼らの村を後にした。彼らは、スー族の戦闘的な侵略をうけ続け、余儀なくエルクホーン川の流域の南西の地域に移り住んだ。

1836 年の 10 月にベルビューで結ばれた協定（U. S. Stat. at Large, vol. vii. p. 524）で、オマハ族は、オトー、ミズーリ、ヨンクトン、ならびに、サンテ・スー族とともに、ミズーリ州とミズーリ川に挟まれた土地の所有権を合衆国に譲渡し、これに対する代価を手にした。オマハ族は、政府は部族が使用するために 100 エーカーの土地を分譲して、フェンスを作り保護する約束で、ベルビューの近くに新しく建てられた代理人の近くに彼らの村を建設することに同意した。

1836 年から 1854 年の間は、オマハ族の村はベルビューからそれほど遠くないところにあった。この合衆国インディアン局は、オマハ族のほかにはいくつかの部族の出来事について統括していたが、その部族の多くが、病気やそのほかの災難により人数を減少させていた。この期間の間、オマハ族は、彼らの古い住居であるホマーの近くの村に戻り、そこで生活する試みをしたが、いずれも彼らの家族や、食料、そして、ポニーを脅かすスー族の戦闘集団により阻止された。

1854 年にオマハ族は、合衆国政府とワシントンで協定（U. S. Stat. at Large, vol. x. p. 1043）を結んだが、ここで、彼らは自分たち自身が利用するためにホマーの近くの彼らの住んでいた古い村から 2・3 マイル南の場所のミズーリ川の境界に 300,000 エーカーの土地を確保し、ネブラスカの狩猟の地域を譲渡した。協定の中には、インディアン部族との間でその時点で結ばれた殆どの協定の中で繰り返されていたが、保護居留地の一部を測量し、ある程度の土地を、永住の家を建てたいと願っている個々人に分け与えることとなっていた。（6 参照）製材所と製粉所が、新しいオマハ族の保護居留地に、部族の資金ではなく建てられた；また、鍛冶屋と農業の従事者が準備されることとなった。この協定により譲渡された土地に対して受け取られるお金は、合衆国政府が保管すること、そして、支払いは 40 年間払いとすることが決められた。

1854 年にワシントンで結ばれた協定（U. S. Stat. at Large, vol. xiv. p. 667）により、オマハ族は、ウィネバゴ族の居住地、ここはミネソタの彼らの古い住居地から除かれていた、このために北部の一部から細長い土地を合衆国に譲渡した。この土地に対する支払いの部分は、貯蓄、用具、そして、土地の耕作のためなどに使われるはずだった。オマハ族の夫々の個人の持分に分配するために準備されたものには、1854 年の協定の第 6 項含まれていたが、この繰り返しであり、その条項は、彼らの混血の親戚のもの、そして、彼らと

居住を共にする者は、約束された分配者の中に含まなければならないということになっていた。

1831 年の 3 月 3 日の条例で、インディアン部族と政府の合意の形態が変わった；もはや協定はこれ以上結ばれないこと、しかし、法律は立法されるべきであり、いかなる条例の遂行も、“部族の同意が必要である”ということになった。

1872 年の 6 月の条例 (U. S. Stat. at Large, vol. xvii. p. 391) で、オマハ族は、彼ら自身の保護居留地の西の部分から 50,000 エーカーを政府に売った。この譲渡により得られた収入の一部は、農地を囲ったり、家を建てたり、器具や生活用品の購入、そして、学校の建設と維持のために消費された。

1874 年の 6 月の条例 (U. S. Stat. at Large, vol. xviii. p. 170) で、居留地の北の部分の、20 区画がウィネバゴ族の使用のために譲渡された。

1882 年の 8 月の条例 (U. S. Stat. at Large, vol. xxii. p. 341) で、オマハ族は、夫々の男、おんな、そして、子供も部族の土地の一部を受け取る形で、個々人に対して彼らの土地を与えられた。この土地は特権により保証されたもので、合衆国は信用に基づき、25 年の間、これを保持するというもので、その間、その土地には税金が掛からず、他人に貸したり、譲渡は出来ないと言うものだった；この信用の期間が済むと、領地における特権は、ネブラスカ州の法令に従い、分配を受けたもの、あるいは、彼らの相続人に与えられた。この条項は、オマハ族を州の法律、市民法、そして、犯罪法の下に管理することとした。保護居留地、ならびに、スー・シティ、アイオア、そして、ネブラスカのオマハの間を走る鉄道の土地の南西部の群区の分配をされなかった土地は、白人の入植者の購入に開放された。

1887 年の 2 月 7 日の“個人所有条例”における条項により、土地を分配されたインディアンとしてのオマハ族は、合衆国の市民となった。

1894 年に、保護居留地の中をとる鉄道敷設の権利が与えられた。(U. S. Stat. at Large, vol. xxviii. p. 95) この権利は拡張され、そして、1896 年には、新しい権利が与えられた。

(U. S. Stat. at Large, vol. xxx. p. 344,912) スー・シティーと西部鉄道会社の土地測量が 1905 年の 5 月 2 日に内務省長官により認められた。1907 年の 4 月に保護居留区を通過する鉄道が完成した。この鉄道の経路に二つの町があり、土地を相続していたインディアン達との間で合意していた土地は、議会の条例により、その土地を売ることが許された。Rosalie の市街地は、1906 年の 1 月 18 日に内務省長官により認証され、1907 年の夏に最初の部分が譲渡された；町の名前は、Joseph La Flesche の娘である、故 Rosalie La Flesche Farley の名前が付けられた。1910 年の人口は 147 人だった。Walthill の市街地は、Rosalie と同時に内務省の長官により認証され、最初の部分は、1907 年の 5 月 22 日に譲渡された。町は、Walter Hill (J. J. Hill の息子) と名づけられたが、彼は、この町を通過する鉄道の一部を建設する責務を負っていた。こうした市街地のインディアンたちによる土地の譲渡の扱いは、Susan La Flesche Picotte M. D. と彼女の家族の人たちの献身的な努力により、

次のような事前の対策が出来るまで、多いに時間を節約することが出来た—

いかなるモルツ、酒、あるいは、ワインなどの飲み物と言え、通告された屋敷に保管したり、使用してはならない。そして、この状況に対するいかなる違反、被授与者による、あるいは、二番目の組の言われた当事者のもとでの権利の主張をするいかなる他の人であろうとも、これに違反する者は、譲渡を無効にし、そして、彼の相続人、もしくは、譲渡人という最初の組の当事者に土地を返却される。

内務省長官の承認を得て、この条項がオマハ族、ならびに、ウィネバゴの保護居留区のあらゆる市街地の証書に付け加えられた。ウォルトヒルの町の都市計画会社がレンガと石材

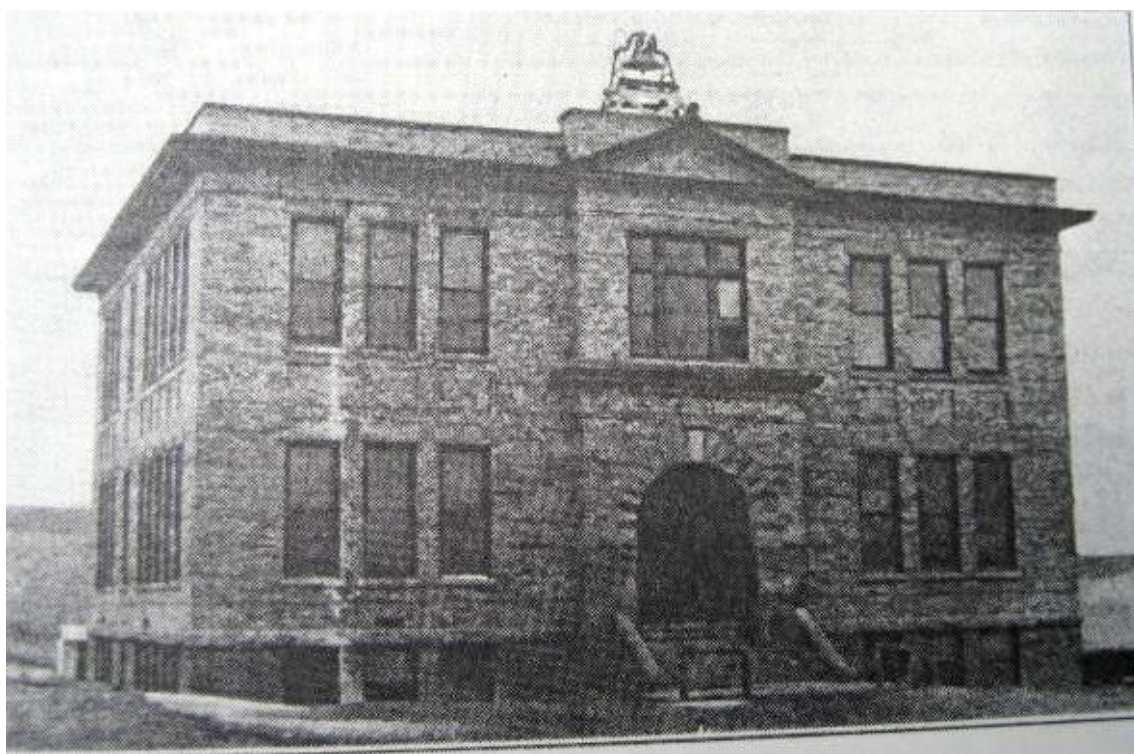


図.126 ネブラスカ、ウォルトヒルの学年別学校

など、メインストリートの建物に使用する建設材料を制限し；こうしたことの実施が、建物の建築を一時的に遅らせてしまったが、その一方、これにより町の見栄えと恒久性が著しく高尚になった。ウォルトヒルの人口（1910年）は、810である。体制が出来て一年も経たずうちに、町はレンガと石造りの広くて便利な学年別の学校の建物(図.126)のために、14,000ドルを費やしたが、ここでは、白人とインディアンの両方の子供たちが教育を受けた。

宣教師たちの仕事

部族、あるいは、最初の宣教師がオマハ族に与えた影響がどんな思想を目指したものであったのかを追跡することは困難であろう。18 世紀の最後の世代になると、部族の個々の人たちは、取引のための毛皮を運んでセントルイスまでミズーリ川を下って行った。彼らはそこに居る間に、生活の文明化された形態を見、そして、町の人たちの宗教的な習慣を知った。代表団が用意された部族同士の交易を通して、キリスト教に対する漠然として知識を得た。19 世紀の初めの頃の時代に、交易会社に雇われた 2・3 のフランス人が妻としてオマハ族の女を連れてきたが、こうした人達は、改宗させようという精神は示さなかったばかりか、彼らは原住民の生活様式、あるいは、原住民の信仰を変えようとさえしなかった。時々、こうした男達の息子が彼らの父親の取引のための旅に連れてこられた；ここで、彼らは、フランス語とビジネスのやり方の知識を得たが、そうしたものを身につけたことが、取引に関わった父親の任務を多いに助けた。例えば、こうした息子たちは、学校に入れられ、そして、英語を話せるように勉強し、ローガンフォンテネレやルイスサンズーニの人々に対し、両方のケースで、彼らは、公式な通訳として貢献することが出来た。オマハ族が伝道師たちと直接接するようになったのは、19 世紀の第三世代までと言うわけではなく、又、彼らの接触は定期的にとりより、時に応じてというものであった。1845 年に、最初の恒久的な使節団がネブラスカのベルビューで、長老派協会により編成された。当時、オマハ族は、ある意味で彼らの外敵、スー族からの保護のため、そして、別の意味で、新しく設立させたインディアン管理局の統括下に置くために、政府により、ベルビューの近くに入植することを指導されていた。オマハ族により所有が主張されていたところに使節団のために学校が建てられ、数人のオマハ族の子供たちが先生たちの指導のもと教育された。この学校に隣接した庭や畑で、オマハ人は、鋤とか、その他の、農業用の道具の実際の使い方をはじめてみる機会を得た。エルクの肩の骨で出来たものに代わり鉄製のくわが取引商により持ち込まれたときには、植物を植えたり、あるいは、耕すための昔からのやり方になんらの変化もなかった。オマハ族が使節団の畑を眺めるまでは、彼らは、耕地を土をひっくり返したり、トウモロコシが長い一筋の畝に植えられるような光景を見るのがなかった。この使節団の学校で、沢山のオマハ族の子供たちが最初の教育を受け、僅かではあったが、本業のなかで、それが、彼らの人々の生活の変わった状況に適合することを助けるものであったはずだった。既に、ミズーリは州で会った；モルモン教の人たちが既に、その流れと交錯していた、そして、もっと西部の地域に入っ行っていた。ネブラスカが直ぐにその領域となり、そして、新しい入植者たちがインディアン達の土地に貪欲の目を投じていた。1853 年に合衆国の使節団が、ブラッテ川の北のミズーリ川の領域にある広大な肥沃な土地のオマハ族の占有権を放棄させることを意図し、予備的な調査をするためにベルビューに到着した。翌年に酋長とその他の指導的な立場にある人たちが、ボートでミズーリ川を下り、オハイオ川を遡り、ゆっくりとアレガニー山脈を越え、首都に続く

道を取りワシントンに出向き、こうして、1854年の協約が実行された。これに続く3年以内に、オマハ族はベルビューを後にして、北の彼らの保護居留区に向かって移動をしたが、彼らは、去る前に、長老派協会に1平方マイルの土地を寄付した。ここは、現在、ベルビュー・カレッジになっている。

使節団

1857年に、長老派の使節団が、オマハ族についていき、そして、次の年にその目的のために建てられた大きな石材作りの建物が完成した。その使節団の家(図.127)は、ミズーリ川を眺める事の出来る後ろが崖になっている土手の上に建てられていた；その下には、所々に深い森が生い茂っており、あちこちで大草原に繋がっていた。この広大な建物の中で、下宿しながらの学校が開かれた。集合ホールは、教会の働きをしていた。宣教師と彼の家族は、そこに住み、オマハ族の子供たちは、こうして、一時的に彼らの世話で面倒を見て

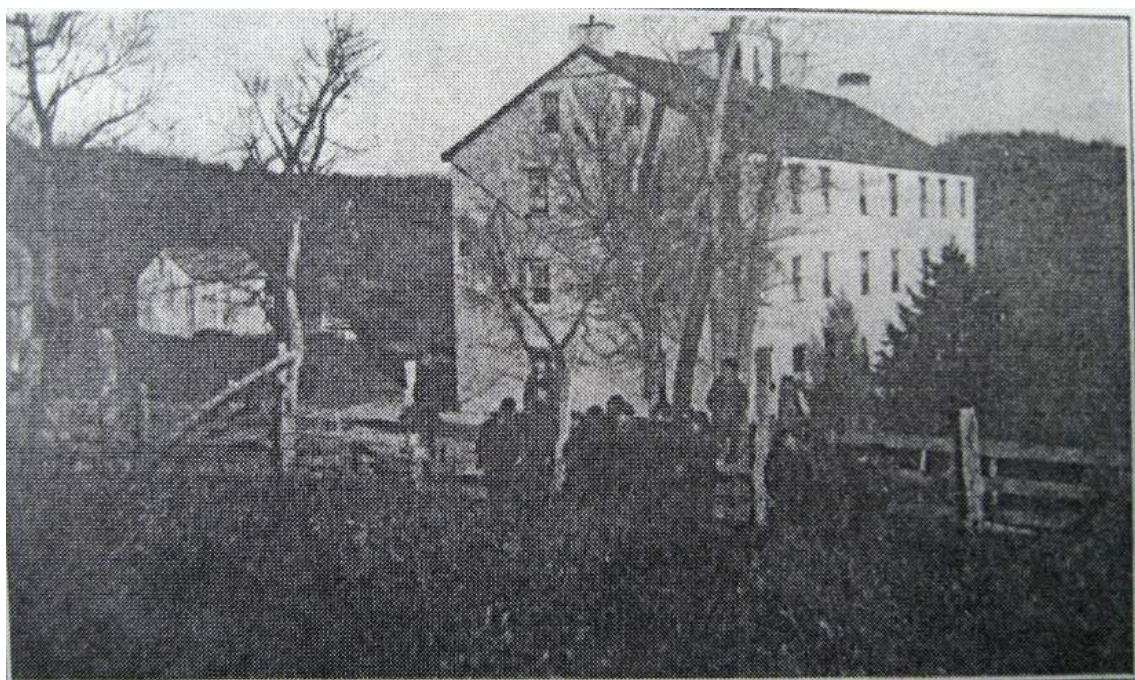


図.127 古い“使節団”、今は倒れて破壊されている。

もらっていた。ごとも達には、全て英語名が名づけられ、その殆どは今でも残っており、家族の容認された名前となり、そして、その地の祖先として出てきている。およそ30年の間このミッション・スクールは一般的な忠実さで効果的な運用がなされ、続けられていた。こども達は英語の話し方、そして読み書きを教わったいた、少年たちは農業のやり方、そして、農場の家畜の世話をならい、少女達(図.128 参照)は、料理屋、衣服の作り方などを学んだ。伝道師たちにより成し遂げられた仕事、人々に多大の利益をもたらし続け、そ

して、先生たちとオマハ族が、白人たちの急激な増加のするなかで住んで行く為に献身的な仕事をしてくれた人たちは、今日、感謝と好意の気持ちで追憶されている。^a

学校の講堂で開かれたいた教会は、その信者の中には沢山の原住民男性、そして、女性がいた。こうしたキリスト教徒のオマハ族の者の勤勉で規則正しい生活は、彼らの毎日の生活のなかに、先の世紀の終わりのころまで、教会やその学校で彼らに教えられたキリスト教の戒律を自分たちの毎日の生活の中に適用しようと願うまじめさを反映していた。1885～86年に別の使節団の建物が、保護居留区の南部地域に同じ宗派により建設されたが、2・3年後に、それは消えてしまった。この時に教会（図.129）が管理局の近く、スー族の戦闘集団から政府の雇用人を保護するために1864年に建てられた防塞からあまり遠くないところに建てられ、正式の牧師により指導された礼拝が今もこの建物で持たれている。



図.128 オマハ族の少女“ミッション”スクールの生徒

一つの大きな困難が使節団の先生の努力を悩ましていた；これは、インディアンの人々が接触するようになった殆どの白人たちのキリスト教の教義に属するものとして我々に教えられた基本的なものと振る舞いとの間の矛盾が原住民の人たちの気持ちに与える影響であった。全ての白人がキリスト教徒であるとみなして、インディアン達は自ずと、彼らの生活を彼らの信仰の例証のためのものであると見ていた。インディアンの古い宗教派、嘘をついたり、虚偽の行動をする男は、超自然的な懲罰を受ける危険がある；人々に知られている例えとして、正直でない者は、稲妻に打たれて、命を縮められるというような話があった。インディアンは、現在、嘘を話すような、しかも、何の悪事を感じてもいないような人々接触するようになっているし、オマハ族の人々が彼らが会った多くの白人たちを指導するときに使われている牧師たちの教える教義と一致させることは困難なことであ

a オマハ部族の中の使節団の仕事に献身的に働いた男や女たちの名前や記録については、読者は Presbyterian Church の Foreign and Home Missions の年次レポートを参照されたい。この教会だけが、この部族に力を貸していた。

ると気づいたことに何の驚きもない。結局、インディアンは、表面だけを繕っている人たちの生活にそう大して力を持っていないように見える宗教に対して心からこれを受け入れることは出来ないのだ。彼の牧師の教えに対して、彼は依然として敬意を表し、正義と真実という原住民の観点をゆっくりとではあるが変えようとしたに違いない。なおも、あちこちにイエス・キリストの生き方を教えてられている男と女たちがいたのだ。



図.129 オマハ族の教会

以前は右に建っていた“ブロックハウス”は取り除かれてしまっていた。教会は、今は（1911）玄関のところが、インディアン達が用意した 1000 ドル以上で拡張されている。

彼らはそこに、達成の困難な高い理想を認識し、人の一生の中でそれを実現することに失敗するというのは、その理想それ自身よりも、個々人の弱さに起因しているものであると理解している。

新しい保護居留区と監督局

新しい保護居留区に建てられた監督局の建物はミズーリ川から 3 マイルほど西のところにあった。その地域で唯一そこにたどり着く道の途中にあった。その道は、南のある交易所からさらにミズーリ川が北に進むところまでゆくものであった；これは、“軍事用の道”として知られていた。1 年ないし 2 年の計画で、オマハ族は三つの村に分けられ、そして、

入植した：一つは、保護居留区の南西部に；もう一つ（これが一番大きかったが）が監督局の近くに；三番目のものはミズーリ川の土手からそう離れていない北西部にであった。この人々の分割は、部族的な意味合いはなかった。部族が毎年恒例の狩に出かけるときには、*hu'thung* (p.138 参照) 一つの集団のようにキャンプをしていた；とにかく、古い部族の組織というのはもはや影響を及ぼさなくなった。監督局の近くの村は、真ん中の部落と呼ばれていて、現在は、ブラックバード川として知られている小川のほとりにあった。写真 19 は、もう 27 年以上も前に取られたものであるが、この土造りの家は、この真ん中の村が作られたときに建てられたもので、こうした小屋の最後の代表的なものである。

監督局の建物

オマハ族の保護居留区が出来たときに、ミズーリ川は、旅行の最も早いルートだった。セントルイスから蒸気船が監督局や使節団の必要とする物資を運んだ。波止場は、使節団の建物のしたの川沿いにあった。ここにまず、監督局の店が立ち、そこでミッションスクールから来た子供たちは働くことを許され、大工や鍛冶屋の取引のことを沢山学んだ。後に、監督局に寄宿学校が設立され、そこに店が立ち退き、製材所と製粉所が建てられた。こうした建物は、先の世紀の終わりには全てなくなってしまった。公立の通いの学校が設立され、監督局の店は、原住民たちの個人企業にとって代わられた。

1878 年に議会が、合衆国のインディアン監督局の権威の下にインディアンの警察を作る規定をした；彼らは、秩序を維持し；不法なお酒の取引をする者などを含めた違反者を取り締まり；無断欠席する子供を学校に戻すこと；役所の地位を保全すること；そして、その他もろもろのサービスを実行することになった。このあと、沢山の“警察”がオマハ族の監督局に設置された；部族の沢山の良心的な人が、権力側に加えられた。彼らの仕事が、彼らに、そして、その彼らを通して、人々に白人たちの社会に雇われている人たちはどのようにして社会的な福祉や秩序を推進していくのかということについて沢山の現実的な知識を与えた。— この教訓は、保護居留区の周りの入植者たちがどっと増え、日毎に白人たちとの接触する機会が増えていったので、非常によいタイミングであった。^a

部族の出来事に対する取引商たちの圧力

取引商たちの影響により持ち込まれたオマハ族の職業と生活における変化が次のように話されていた；しかし、そこには、取引商が自分たちに感じさせた、別の見方もあった。

a United States Indian Service ならびに、インディアン達の文明化された生活に関する知識を改善するために政府によりなされた努力についての詳細は、Commissioners of Indian Affairs の年報を参照されたい。

取引商者は、酋長やその他の指導的な人たちが言いなりになるのに気づき、彼らに贈り物を贈り、政府の役人は取引商たちの影響を受けて、そうした男達に認証だけをあたえ、“肩書きだけの酋長”を作り上げていた。彼らの首にはメダルがかけられ、旗がプレゼントされ、そして、かれらを取引商者に対して忠実であるようにするための努力がなされた。イギリス人商社がフランス人やアメリカ人にとってかわり、英語が、従ってメダル、旗。そして、ある国の認定書などは、別の国が力を持つようになったときには、放棄されなければならなかった；結局、合衆国の権威者たちは、アメリカのバッチが他の外国の贈り物にとって代わるのを理解しないわけには行かなかった。この部族の出来事に対する外側からの圧力が、人々の生活や考え方を複雑にし、酋長の持っている古来からの形と権威を混乱させた。人々は、もはや、彼らの親達が辿った道を歩むことが出来なくなっていた一変化はありとあらゆるところにあった。確実な移住の流れがますますトラブルと困惑を増やしていった。インディアン達の小さな一区画では、トウモロコシが元気に育っているようではあったが、原住民たちの権利は、押し寄せる白人たちのなかで、殆ど尊敬されなくなっていた。こうしたこと全てが多かれ少なかれ大勢の部族を再び野生化されていた。しかしながら、ある時、ある男は自分自身を困難を乗り越えさせ、そして、ことの成り行きを認めることが出来た。そんな男が、彼の名前の最後の酋長ビッグ・エルクであった；ある種のたとえ話のなかで具体化された、将来の出来事や彼の方針についての彼の憂鬱は、p84に表されたとおりであった。ビッグ・エルクは、彼自身の変り行く将来の外観を、彼が友人となり気が引かれた、そして、かれが後に友人として選んだ混血の若い男に強い印象を与えた。この若い男こそ、**Joseph La Flesche** であり、彼は、後に部族の福祉において強い影響を持つようになったが、これについては彼の経歴のところでさらに詳しく述べるのが適当であろう。ここで示された事実は、**Waje'pa (Wa'thishnade, pl.29)**、彼が亡くなる直前に、ワシントンに著者たちを最後に訪問+して来たときその時に彼から得られたものである。

JOSEPH LA FLAESCHE

先の世紀の初期の頃、一人のオマハ族の少年がスー族により捕虜として捕まった。彼は、その捕虜の家で大きくなり、そして、人々の間で影響を与えるような人になった。彼の一人の妹が、**Joseph La Flesche**、の妻になったが、彼は、ある毛皮取引会社に雇われたフランス人商人だった。この家族に一人の息子が生まれたが、多分それは、1818年頃のこと、オマハ川のほとりの **Tonwontonga** の古い村だった。取引商にはどうしても必要な夫の長い不在は、若いオマハ族の妻には飽き飽きするもので、結局彼女はそのフランス人の夫のもとを離れ、彼女の部族の一人と結婚した。彼女が再婚した時に、幼い **Joseph** は、6歳ぐらいだった。彼は、おばに連れられて彼女の兄のところに行ったが、その者はスー族と一緒

に暮らしており、結局そこで3年、あるいは、それよりすこし長く、住んでいた。そこで、彼は、決して忘れることのないダコタ語で会話することを学んだ。彼が、彼のおばとオマハ族のところに戻ってきたときに、彼の父親が部族と取引するためにそこに来ていた。彼は息子を自分のところに戻すようにおばに嘆願したが、しかし、彼女はこれを拒んだ。2・3年後に、彼女は同意し、**La Flesche** は、彼の息子をセントルイスに連れて行き、若者はそこでフランス語を話すことができるようになった；後に彼は、父に同行して、取引の遠征旅行に行った。若い **Joseph** は、老オマハ族の酋長達と懇意になった。特に、**Big Elk** に好かれ、彼らとよく話しをし、そして、彼らから酋長となるのに必要な事項・資質を学んだ。部族はそれからベルビューの村に住むようになった。**La Flesche** は彼の息子に我慢しきれなくなり、彼が酋長達と長い時間を費やすことに小言を言うようになったが、若者は部族の習慣や言い伝えに精通するようになっており、自分の心のなかで、酋長になることを既に決めていた。しかしながら、**Joseph** は彼の父親の旅に同行し、アイオワ語、ポウニー語、そして、オトー語を話すことが出来るようになった。彼は、非常に狩が上手く、そして、彼自身のやり方で取引をする計画を立てていた；これを彼は後に実行し、そして、大成功を収めた。彼が最終的に入植し、そして、彼の母親と同じ仲間の人達と運命を共にする決意をしたのは彼がベルビューの村に住んでいる間のことであり、直ぐは彼は彼らに認められるようになった。彼は、白人たちが沢山住んでいるし、インディアン達は多かれ少なかれ白人たちのやり方や習慣に合わせなければならないということを認識するに十分なほど世の中をよく理解していた。問題は、**Big Elk** の気持ちと同じように彼の考えの殆どを占めている、部族の生活の水準に既に漠然と見えている新しい状況に如何に合わせるかということであった。この時代のある夏（多分 1845 年から 1850 年の間）、部族が毎年恒例の狩に出かける準備をしている時に、**Big Elk** が **Joseph** に主だった人たちが集まる会合（p.276 参照）に出席するように要請した。何の反対もなく彼は **Big Elk** の次の席を与えられた。これは、その若い男が進言された経歴に昇進していく証であった。彼は既に彼の 100 もの榮譽（p.495）を数えるのと同じ位の、酋長の資質（p.202）を認めてもらうのに必要な贈り物の準備を始めていた。当時、**Big Elk** の息子が生存しており、この息子が彼の地位を引き継ぐものと言うのが、酋長の願いであった。しかし、若者は亡くなり、その出来事の後、**Joseph** は、**Big Elk** の息子として認められるようになり、そして、**We'hinshte** 準血族のものであるということになった；このことは、彼の母親は **Inke'cabe** 準血族に属しており、父親は白人であるので、彼は、彼の母親の準血族に入るものとされるべきであるということからすれば、この慣わしにまったく反するものであった。一方、入植者たちの流れの状況はますます増える一方であり、**Joseph La Flesche**（図.49）が **Big Elk** の占めている地位に駆け上ろうと懸命にこの計画を実行している間、彼は、又、ある考えに固執し、彼は、彼らの前に開かれているのを見たその新しい経路、これは是非とも通らなければならないものであるが、その中で、最も有利な形に人々が進んでいるくのを補助することを企てていた。彼は、ベルビューに開設されたミッションスクールを観察し、伝道について

話をしていた。彼は、オマハ族が狩猟する大地を合衆国に譲り渡したときに現在の保護居留地の選択で結局は合意することになることに積極的に取り組んだ。1853年に Big Elk が亡くなったときに、Joseph La Flesche は古い体質の酋長に求められる資質を完全に満たしていた；彼は、Big Elk の地位に着き、そして、2人の Ni'kagahi u'zhu、もしくは、大酋長の一人となった。彼は、1854年に協定を結ぶためにワシントンに行ったオマハの派遣団に同行していた。La Flesche は品物でされていた支払いの改善に役人と議論した。彼は、部族は土地の代償として現金での支払いを求めていると、現金であれば、人々は必要なもの、道具、食料、衣類など、をそれで買うことが出来ると主張した。彼の主張を説明するために使われた銀の10セント硬貨は、オマハ族に商品の代わりに現金の支払いをするという功績の記録に長く輝き続けたものであったが、しかし、彼に業績を残したものはある種の取引商たちの紛争の恨みともなった。彼は、ベルビューに若者達を集めた。彼らは、進んだ考え方のできる人たちで、“若者たちの集団”として部族の中で後に知られるようになるものの中心的存在を形成する人たちだった。部族が彼らの新しい保護居留区を占めるようになり、その村に住むようになると、Joseph La Flesche は、“使節団”が近くに建てられるはずになっている場所の僅かながら南の場所を選び、そこに彼は、幾分白人の入植地に似たような村を作った。

“‘見せかけ’の白人たちの村”

この新しい企てのために、Joseph La Fesch の中間達は丸太をきりだし、これを使うために製材所に持って行った。Joseph は、自分の家を建てるために白人の大工を雇い、こうした技術者の指図に従って、村の者が丸太から得られた挽材を使って自分たちの小さな組み立ての家を建てた。屋根材は買ってこなければならなかった。Joseph の家は、ホールの両側に部屋のある二階建てのすこし大きな家だった；ここに彼は店を開き、数年の間かなりの交易をしていた。彼は道路を開いたが、一つは獲得所につながる道、一つは蒸気船の港と使節団のところに行く道、そして、もう一つは村の中心につながる道だった。この最後の道とその路地には何軒かの家が建っていた。彼は、丘の麓に100エーカーないし、それよりやや広い土地を柵で囲い、雄牛を飼育し、大地を耕すくわを用意した。この土地は、村の夫々のものたちが、自分たちで農業を営むための土地が持てるように、別々に分けられた。何軒かの家族が村からそう離れていないところで小さな畑を始めた。保護居留区に育った最初のトウモロコシが植えられたのは、この麓の土地であった。モロコシとトウモロコシの大きな実が収穫され、そして、冬には彼らの産物をスー・シティまで、そして、さらに北の川岸のアイオアに最近出来た入植地まで氷原を越えて運んでいた。この村の子供たちは皆、彼らの両親によってミッションスクールに送られていた。部族の保守的な人たちは、村をあざけて、“‘見せ掛けの’白人たちの村”と呼んでいた。

この村の人たちにより示された企画は一般的には部族に顕著な影響を与えた。La Flesch

が酒びたりになったものに対してとった行動（p.621）が、話されている。勿論、この男は罪を免れたわけではないし、彼の考えたことは人々の権利でもあるという擁護もあるので、彼は責め立てを我慢しなければならなかった。周りにあらゆる変化が起きたけれども、彼は 1888 年に亡くなるまで、部族の指導者として残っていた。波乱に満ちた生涯を通じて、彼はあらゆる儀式の中で彼の役割を、そして、酋長として求められる器量を十分果たし、アメリカ合衆国の一人の市民としての投票を投じて生きてきた。次の出来事は、この男の性格を如実に現していた：彼は、彼の娘たちに“誉れの印”となるものを残すために、かれをある程度の地位につけるだけの“功績の数”を数え上げることが出来たが、彼はそれを刺青としていれなかったばかりか、彼の息子たちが耳にピアースすることも許さなかった。古いしきたりで賢者に求められる沢山のものを持っているにも関わらず、彼が自分や子供たちが目立つことを拒絶しなければならないのか、何故そうするのかと尋ねられて、彼は返事をした：“私は、私の息子や娘達が白人と付き合わなければならない時代を理解しながら生きていくだろうといつも確信している、そして、私は、彼らは彼らの将来の環境の中で自分たちが好ましくない人たちかも知れないなどと思わせるようなものは何であろうと決して、表に表されるべきではないと決めたのだ。”

保護居留区の検証

1854 年に結ばれ、そして、1865 年に再契約された、土地がこの地に入ってきて彼らが自分の家を保有するようになるために測量が行なわれなければならないという協約は、1872 年まで実施されなかった。それは、他の村の人々を刺激し、最終的には政府の送れた対応を引き出した“‘見せ掛けの’白人たち”の村の影響によるものだった。ミズーリ川からオマハ川に挟まれた保護居留区の東部地域は、市街地とその再分割地まで測量された、雄牛たちと農地を耕すくわが部族の金で持ち込まれ、そして、大平原か、沢山の人達により、彼らの政府から発行された認定書により、彼らにもたらされた土地選択の権利に基づいて、かつてに分割され破壊されていった。見地がなされたあと、人々は林を切り、それを管理局の製材所に持ち込んで、一冬中を過ごした。自分たちの切り出した丸太を製材所に持ち込み、そして、家が建てられたがこれにより、労働者たちにはほんの僅かの利益がもたらされた。集められた素材の山は決して使われなかった；他の沢山の約束事と同じように、満足させることは、人々が希望と大志を失うときまで延期された。

バッファローの絶滅

この頃になり、バッファローの群れの殺戮が獲物の獲得に深刻な影響を及ぼし、1876 年のあとは、毎年恒例の狩が行なわれなくなり、全く新しい矛盾に人々は遭遇した。穀物の食料に全く依存することになっていない、そして、牛肉の味に慣れていない、彼らはそ

の変化に悩まされた。部族が、バッファローの肉 (p.244 参照) の代わりに牛肉を購入して、神聖なる柱 (p.230 参照) の油塗りと結びついた古い儀式をして Wako'da に祈願しようと考えたのは、この困窮のときであった。こうした金のかかる経験のいくつかは、新しい悲嘆の思い—自分たちの親たちが頼りにしていた、そして、これまでの世紀では決して問題など起きなかった食料が、かれらは バッファローは人々が使うために“四方のどこからでも” Wako'da により送られてくると教えられていたが、其れがなくなってしまうという現実のこととして認識すること、をもたらしただ。肉体的な貧困さに付随して精神的な貧困が生まれてきた。彼らの手元に残っていたトウモロコシを、麦を育てるように植えつけることが増えた。こうした収穫を彼らは白人たちの入植地で売り、そして、食料を手にしていった。豚、鶏、そして、蓄牛の数が次第に増えていった。かつて元気だったオマハ族は貧民になってしまった；彼らは政府からの配給を受けようとしなかったが、しかしながら、彼らは、自分たち自身でもがき、そして、老人たちは若い世代の人たちの暖かい支援と努力で支えられたいた。

南北戦争の間、オマハ族は合衆国政府に忠実を近い、斥候として貢献し、ユニオンバシフィック鉄道の建設の間、これを警備していた。

“議会” の設立

毎年恒例の狩を強制的に放棄させることと生活や部族の習慣の中に起こった変化が、部族の統治における形態の変化、これは、合衆国管理局が望んだことであるが、この状況を生んだ。疑問が、しばしば、発生して、その問題の解決には、部族と管理局との間の協力関係が必要となった。部族の会合では手に負えない、管理するのが難しくなったので、管理局が集合をかけ易い極少数の酋長とその他の指導的な人たちで“議会”もどきのものが結成された。こうして、古い会合での酋長の指導性は消え去った。議会は人々を代表していたが、全ての統治に関する権威は合衆国インディアン監督局が掌握するようになった。過去のものに属するようなものでオマハ族にはいまや何一つ安定しているものはなかった；唯一見慣れた景色が、彼らは今も自分たちの父たちの大地に居るのだと思わせるように残ったいた。

ポンカ族の悲劇

1877 年に晴天の霹靂のように、突然、彼らの同門であるポンカ族の、彼らのニオブラーラの家からインディアンの居留地に悲痛の立ち退きがあった。そして、1879 年の春に、老酋長の **Standing Bear** と彼の仲間たちは、酋長の愛して止まない息子の遺体を埋葬するために、これを運んで、もとの居住地に戻るときに、合衆国の兵士が来て、オマハ族の全ての人たちに恐怖をもたらし、“居心地の悪い土地”と呼ばれたていた地区に強制連行した。

彼ら自身の家は危機にさらされているのではないかと思いながら、沢山の人が彼らの家と土地の所有を認定した証書を携えて、大きな白人の入植地に行き、そして、こうした書類の法的な有効性を確認するために法律家に相談に行った。彼らは、携えて行った証書はもはや土地を占有する権利はないと言われ、恐怖と悲しみのこの体験が彼らに前に述べたようなことをもたらした。それは、まさに大地が彼らの足の下で切り離されるような、彼らがこれまで信頼してきた全ての人たちから見捨てられたような、そして、彼らがいつも尊敬してきた政府からさえも裏切られたように思われた。

土地の占有所有の訴え

著者たちの一人が民俗学的な研究をするために部族の中に入っていったときに、そうしたものが実際の環境であった。彼女は政治的な出来事については殆ど知る由もなかったが、しかし、合衆国政府に知られている事実は、役人たちが彼らの家と彼らの親たちのお墓として神聖化している土地に対して、合法的な権利を与えたのだろうとはっきりと信じていた。この信念に動かされて、彼らの占有証明書のある土地、あるいは、条例が発効されて、選択した土地での生計が出来るように努力をして人々の間での努力に関する情報を収集するために膨大な時間が費やされた。こうした人たちが陳情の会議に参加するように召集され、ここに、オマハ族に対する重要性を証明し、合衆国のインディアン部族に対する政府の政策の中での責任を明らかにした 1887 年の土地単独所有条例の草案^aとなったものが、歴史的な記録として与えられた。

土地の単独所有の授与に関するインディアンのオマハ部族の委員の記録

合衆国長官殿

われわれ、署名者たちは、インディアンのオマハ族の委員であるが、我々は、土地の分配の土地所有証明書を持っているか、あるいは、オマハ族の保護地区の境界のなかに要求に基づいて入ってきたのです。我々は、3 年から 10 年かけて、夫々の土地で働いてきた；夫々の農場では、5 から 50 エーカーの耕された土地を所有している；我々の多くは、こうした土地に自分の家をたて、そして、誰もが、我々自身と子ども達のために恒久的な家を建てることに努力を重ねてきた。

従って、われわれは、名誉あるあなたに、夫々のものに明確で、納得の行く形で我々が働いていた土地に対する権利を与えてくれることを陳情する次第です。

我々は、我々の農場がもはや我々のものではなく、そして、何時の日か我々は、我々が働いていた土地を強制的に退去させられるだろうということを知りつつ、我々は、今、心から落胆の気持ちで働いているので、この陳情が、あなたの好意的な認識をうけるだろうと言うことを祈っています。我々は、我々が家を建て、そして、子ども達が我々が適合させた生活をよりよくしていくこうした土地で生活し、働くことを望んでいるのです。最後に、そして、我々が、希望と我々の部族のためにより素晴らしい将来に責任を

a Sen. Misc. Doc. No. 31 4th Cong./., 1st sess.

持って前進していくために、我々は、我々の土地に対するあなたの認証をお願いいたします。

敬具

そして、これに 55 人の人たちが署名している。夫々、サインをしたものの状況は、自分の耕した土地の広さに関するもの、自分たちの所有していた財産、そして、自分たちを支え、そして、自分たちに頼っていた人の数に関するものであったが、これらは、それが自分のためのものであるという証拠を残すことを望んで添えられたものであった。

この陳情で要求された次のような“証拠”が、夫々の男達の声として上げられた典型的な苦渋である。

Xitha'gaxe は言っている：

私は、自分の土地で一生懸命働いてきた。だから、私は物乞いをして歩き回るようなことはすべきではない。土地は私のものだし、そこで働き、耕していきたかったのだ。今、私は、そこが自分の土地ではなく、そして、これが私を阻止していると気づいた。私は家を建て、そして、そのために資産を使うと、もし、政府がこの土地からインディアンを立ち退かせようとすれば、私は、それを失ってしまうのではと心配している。家を建てるために、私は三度ほど木を切りに行った。その時、監督局はいつも、政府は私が家を建てることを望んでいるんだと話していた。でも、いつも切り出した木は使われず、そして、腐ってしまった。其れが今、私は、監督局が私にそんなことを言うのは聞くのも恥ずかしいと思っている・・・私は、私の土地に対する使用の権利を認めてほしいのです；私は自分自身の家がほしいのです。

Hon'doⁿmonthiⁿ:

私が少年だったころ、私は沢山の動物たちやバッファローを見た、そして、私の先祖たちは、その動物を頼りに生きてきたのだが、今や全ての動物が居なくなってしまった。私がかって動物を見た場所には、沢山の家と土地を耕している白人たちを見る。***私は自分の土地にたいする使用の権利を認めていただきたい。私はそれを心配している。***朝、目が覚めて、私は自分の土地を見て、神様が私の土地を何とかできるように私を救ってくれ、そして、それを私のものにしてくれることを願っている。

Mawa'doⁿthiⁿ:

私は、鋤をずっと持っていた。私はそれをどう使うのかを知らなかったけれども、私はボニーにつけ、私の妻が手綱を握って手伝いをしてくれた。***我々の中には、土地使用の権利を支持してくれる集団がある。私は、全てが上手くいくかどうか分からないかも知れないが、我々の子供たちは知るだろう。***もし、私がかつて若ければ、私はもっと言うだろう；しかし、わたしは多くのことを話すには年を取りすぎた。私がそれほどまでに一所懸命働いたのは、私が、他のものたちに、自分たちが望んでいるものを実現するためにどれほど年寄りが一所懸命働いたのかを実例として見てもらいたいからだ。

Wa'thishnade:

私が農業を始める前には、私は、死を求めてこの地域を歩き回りながら楽しんでいるようにまさに野生のインディアンそのものでした。***私は、保護居留地に何の政府もいません。私は、もし政府と法律を

持つようになれば、私はこれまでなかったようなトラブルを持つことになります。こうしたことを分かっ
てもらいたいです。我々は、白人たちの間では正義であり、そして、法律がなければ私たちはなにをし
ても上手くいかなくなります。保護居留地には土地の分配の証明書を持った人たちが沢山すんでいます；
彼らは、土地は 彼らのものであり、そして、いつでも、それを保持できると信じているのです。私はそ
れが違うということを知っています。*** 私は、わたしの土地の使用権利書で自分の農園を続けました。
私は、土地が自分のものであると信じていました。しかし、私は、自分の土地が自分のものではないと気
がつきました；政府はそれを反故にしたのだと気がつきました。私は、我々の使用の権利をお願いしに行
きます。政府がそれを我々に与えない限り、我々は、政府が疲れ果てるまでそれを願い続けます。われわ
れは、自分たちの使用の権利が手に入るまでお願いすることをやめるつもりはありません。

Du'bamoⁿthiⁿ:

*** 我々親たちが歩んできた道は今やなくなってしまい、動物たちは居なくなり、そして、
我々の周りには白人たちばかりです。かつてのやり方でのインディアンの方への考え方には、な
にも使用されなくなった；人々は、今や白人たちがするような方法で働きに出かけなければ
ならない。我々は、我々の土地について、その土地は我々の子供たちのために保証され
たものとなるような使用の権利を求めているのだ。もし、我々が亡くなったときに、我々
が土地は我々の子孫のものであると知っているなら、そして、彼らが、我々の労力の利益
を持つようになることを知っているなら、われわれは、気持ちのなかに安らぎを感じた
らう。オマハ族の中には、この使用の権利についてあまり気にしていない人たちもいる。
我々は、そうした人たちにも、この土地使用の権利を与えるように政府に望んでいるので
す。***われわれは、彼らは自分たちの都合の良いようにすべきを思っていますが、彼らは、
この土地について使用の権利を得ようとしている我々を縛るようなことをすべきだとは望
んでいないのです。我々の子供たちは我々に降りかかるような悪さよりもずっと深刻な問
題を起こすでしょう。自分たちの土地に対する使用の権利を求めている我々にそれを与えて
ください。*** 将来のことについて無頓着のように思える人たちの怠惰のために、どうか
私たちや私たちの子供を災いを起こすような立場に戻すようなことはしないでください

Om'patonga:

我々は人を見るときに、その人が考えていることを知ろうとする傾向がある。私を見るす
べたの人は、私がいま、私の土地の使用する権利のことを考えているということを知る必
要がある。***私は、英語を話すことが出来ればと望んでおり、そして私が直接私の心から、
私がしたいと思っていることを話すことが出来ればと思っている。***我々は、自分たちの
土地を使用する権利がほしいの出す。我々は他には何も望んでいません。我々が、自分た
ちの農場の権利が受けられるときには、我々はその時には人間として扱ってもらえるよう
になるでしょう。

Joseph La Fleshce:

***私は、ネブラスカの、この地で生まれました。そして、いつもインディアン達の中で生活してきました。
私は、普段、インディアン達だけを見、そして、彼らだけがそこにいるということを考えてきました。イ

インディアン達は、白人たちがここに来る前に、ずっとこの地に居たに違いありません。***春になれば、彼らは畑に種を撒き、そして、かれらの 1 ないし 2 エーカーの土地を耕してきました。仕事を怠るようなものはいなく、誰もが春には働いていました。くわのないものは、杖のかけらを持って働いていました。種を撒き終わると、彼らは狩に出かけました。自分たちのことに何の心配もありませんでした；彼らが考えている全てのことは彼らが後に残した極僅かの庭のことでした。夏の中頃になると、かれらはテントの布用の毛皮、食料にするための肉、そして、衣服にするための皮を持って帰って来ました。全ての動物を利用していました。家に戻ると、彼らはトウモロコシを収穫し、乾燥させ、その一部を大地に植え、そして、自分たちで十分な準備をして、冬にはカワウソの捕獲に出かけました。それから、私は白人たちをよく見かけるようになりました。彼らはカワウソの毛皮目当てにあちこち歩き回っていました。2 年、あるいは、3 年の間に白人を見ないということが時々ありました。その時には、この地域には人がいなく、見ることができたのは動物たちだけでした。そして、暫くして白人たちが、まるでクロドリが飛んでくるように、やって来て、この地域一体に拡がっていきました。ある者はここに住み着き、ほかの者達はあちこちに散らばっていきました。インディアンたちは決してそんなことが起こるとは決して考えてもいませんでしたが、しかし、どこを見ても白人たちを見ることがありませんでした。私がこれまで話しをしてきたことは、過去のことであり、全てが消えてしまっています。私たちインディアンは、あなたを今見ています。そして、あなた方の敷いた道をあゆんで行きたいのです***政府は、まるで私たちを後戻りさせようとしているように見えます。政府は、われわれを白人たちのようにするのは不適当だとみなしているのではと、我々に思わせています。白人の人は、将来のことを考え、何が良いのかを理解しています。でもこれは、インディアン達もしていることです。かれは、将来を見ているし、自分の唯一の機会が白人のようになることだと理解しています。人々は、そこに長く住んでいれば、その場所が好きになります。私たちは、自分たちの土地を好きなんです。だから、その土地の利用の権利を認めてもらいたいのです。それが他の誰のものでもなく自分のものであると感じたい何かがある時には、我々は、そこを利用する権利をほしいのです；そうして私たちは、自分たちの土地を子供たちのために残すことが出来るのです。あなたは、我々の何人かが、そんなに長いこと住みたくないと言うことを知っています。だから、私たちはこうするのです；私たちは直ぐに別の世界に連れて行かれるでしょう。私たちは、我々の子供たちのために土地使用の権利をお願いしているのです。何年かにわたり、我々は土地使用の権利を獲得できるようにして来ましたが、しかし、政府からは一切の情報が帰って来ませんでした。***この件に関して、我々は自分たち自らを助ける協力的な術を持って以内のです。ですから、我々はあなたに援助をお願いしているのです。かつて、我々は、動物たちに依存して生活をして来ました。われわれは、それが、いまあなたがたが手にいれ、そして、所有している大地からのものであると理解しています。あなた方が我々を人間としてみていない理由は、我々が法律を持っていないからであり、そして、我々がアメリカ市民でないからです。我々は自分たちが生まれた土地のよそ者となっているのです。私たちは、自分たちが人間として認めてもらえるような法律を望んでいます。何か問題が起きたときには、私たちは、自分たちの主張を訴える裁判所がほしいのです。法律は悪者たちを教育するでしょう。そういうことは、犯罪を犯すような人達を処罰するように、トラブルを未然に防ぐことになるでしょう。我々は、使用の権利を求めらる中で、どちらが責任を取るべきなのかもお願いしています。われわれは、それを受け入れることも、その要求を満たすために努

力することも十分そのつもりであります。これまでは、政府はあたかもわれわれインディアン言葉に耳をかさないようにみえます。我々は自分たちに何が必要であるかを知っています。そして、いまわれわれはあなたに直接話しをしているのです。

この陳情は、合衆国のアラバマ州選出の上院議員 **Hon. John T. Morgan** により提出されたもので、印刷しておくように指示され—それがこうして残っていました。その年の冬の間、著者とインディアンたちは、返事を待っていました。殆ど毎日と言っていいくらい、沢山のインディアンたちが雪山を越えて来て、“ワシントンからの何かニュースはあるか？”と尋ねていましたが、答えはいつも同じで、“何もない。”としか言いようがありません。



図.130 古い“ミッション”からそれほど遠くない所の、インディアンの近代的な家

せんでした。それは、国の首都まで行った極僅かの覚書の内容を知っている全ての人たち、とりわけ、それを送った人たちには胸の張り裂けるような待ちの時間でした。彼女の一方には、信用の出来るインディアンが、彼らの家が彼らの処理できないような、話すことのできないような、そして、人々に理解されているような強い力に直面してとても危険な状態あると感じながらたっており、もう一方では、殆ど近づきがたい、がしかし、それだけが恐るべき破壊を避けるだけの力をもった政府がたっていました。春とともに、陳情に応える形で、そして、それに関する条例の力を持っているような人々に言い聞かせるように、確固たる決議がなされた。長く、そして、暫くの間は、独りでキャンペーンがなされ

た。演説が、ワシントンに居た Miss Fletcher により、議会の委員会の前で、教会で、指導的な市民たちの応接間で、オマハ族の人たちが 1882 年の 8 月の 7 日に条例 (p.624 参照) の可決がなされる中でその結果を獲得するまで続けられた。次の年に、条例の法的規定が著者たちにより実行され、全ての男、女、そして、部族の子供が彼らの先祖から受け継いだ土地の配分を受け取った。

1893 年の 3 月 3 日に (27 Stat., 612)、議会は 1882 年 8 月 7 日の条例を改正し、妻には、彼ら自身の権利を認めた 80 エーカーの土地を授け、同じだけのものがこども達にも与えられた。この条例の法的な規定は、1900 年に実行された。

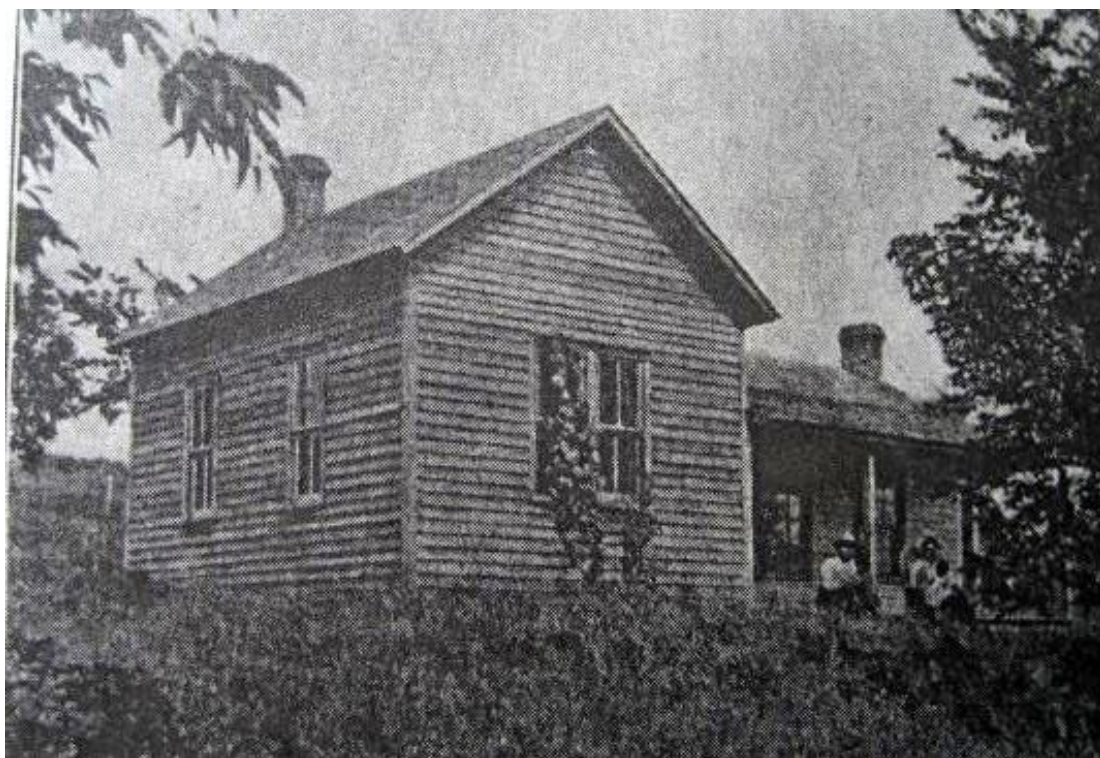


図.131 オマハ族の農民の家

25 年間に及ぶ“信頼の期間”は、必ずしも全てが幸せであったわけではないが、沢山の経験に満ちていた。土地に課税をかけないと言う政策は、道路や橋の改良を遅くし、そうした村の中の土地の価値の増加がオマハ族に彼らの分配された土地を賃貸するよう強いる形となった。そして、多くのものがそのようなことをした：条例は、悪魔と一緒に来たわけではなく、また、人々にとって必ずしも全部がよかったわけではない。それは、インディアン達を白人の隣人とより密接に接するようにし、彼らの間にビジネスの関係を築き上げた。オマハ族の人々は、この相互関係の中で、沢山のことを学んだ。例えば、自ずとであるが、彼らは、自分たち自身の力ではなく、彼らの資産を賃貸するような形で得られる収入に依存するようになり、彼らの土地から精一杯の産物と利益を得るようになり、条件はそれと共に健康的な社会の成長に決してよいものではなくなった。著者たちの一人

が彼らの部族の最後となったとき（1910年の夏の間）、そして、30年前に得られた状況を思い起こしたとき、現在の状況がこの期間の間に人々によりどれだけ沢山のものが、工夫され、そして、成し遂げられてきたかを示していた。（図.130-132 参照）彼女は、沢山の進歩の中で指導的な役割を果たした年老いた人の存在に気がつかなかったが、彼女は、インディアン達に耕されてきた農場に建つ快活な家や、彼ら自身の出来事を処理する能力の改善、子供たちが学校に通うこと、温和な習慣の価値を理解する力を増大すること、そして、オマハ族が白人たちより彼らの社会に持ち込まれた新しい状況のもとで、彼ら自身を維持していくときに見せていたかれらの度量の中で証明された彼らの指導力の結果を理解した。



図.132 裕福なオマハ族の農民と彼の家族

婚姻に関連してのように、あちこちで新しい姿での元で古い習慣の古風で趣のある復活が注目される。男達も、女たちも部族外の結婚についての規則をいまだに遵守しているし、男が亡くなると、かれの後家さんは家族のなかに残された夫の記憶を太いに尊敬するように感じ、たとえ彼女よりかなり年が若く離れていても、故人となった男の未婚の弟と共有した思いから、これが直ちに彼女の夫になるようなことになったいた。

最近の緊張の数年間の中に、部族のなかに、確かに道徳的で文化的な生活をしいる崇高な男や女が居たようで、彼らの例が、部族の外からではなく、中がわから来たものであつ

たので、全てのものに対してより強い影響を与え、この影響が生き生きとし、そして、いよいよ大きくなっている。

現在の状況

“信頼の期間”は、技術的に 1910 年の間に消滅した。あまりにも沢山の資産をもってしまった人たちに、即座にかれらが無差別に無知にしてしまったこと、そして、古い、過去の利益を守ることの必然性が現実化すると、インディアン局は委員会に対して、オマハ族のなかで何が、政府の監督下で既に完璧に引き渡される準備がされている個々人の所有物であるのかを明確にするように指示がなされた。

次の物が、最も最近出された部族に関わる公式な声明である。^a ；

最も最近の国勢調査にもとづく人口は、1,270 名であった。これらの人々のうち、90%は 40 歳以下で、ある程度の英語を話すことが出来る；多くの者は、流暢な英語を使っている。非常に年寄りの極僅かの人たちを除き、殆どが英語を理解でき、40 歳から 60 歳の間の人はすこしだけ英語を話すことができる。

殆どの人々は家に住んでいて、夏の時期のちょっとした変化のとき以外はテントには住んでいない。20 歳あたりでの例外はあるが、男達は、文明化された衣装を着ている。女性の殆どは彼女たち自身の流行の服を身につけており、部分的に白人の女性の流行に似たようなものである。年取った女性は殆どなく、男の年寄りたちもあるとしても極僅かで、馬に乗ることは殆どない。若者はよく、馬に乗っている。極僅かであるが若い女性も馬に乗ることがあるが、その時には、必ず目的にかなない股別れしたスカートをはき、男性用の鞍を使っている。人々のほぼ 95%は、自分自身の車と四輪駆動のバギーを持っていて、彼らの殆どがよい集団を持っていて、かなりよい面倒の見合いをしている。

学校にいく年頃で健康な子供の 90%は、年相応に学校に行っている。よく思い出さないが、10 歳~12 歳の間の一人の子供は全く学校に行っていないかったが、英語は上手に話している。ウォールトヒルの学年別の学校の近くの保護居留区の中には、14 の公立学校がある。こうした公立学校には、毎年、110 から 115 人くらいのオマハ人の子供が入学していた。彼らは、白人の子供たちとおなじような認識がされていて、同等の能力を持っている。

部族のなかでも 2 人は商人で、2 人は弁護士、一人が、Wabach カレッジのスポーツチームのマネージャー、一人は物理学者、3 人ないし 4 人が不動産や株取引のビジネスをしていて、政府関係の仕事に従事しているものは極少く 2 人ないし 3 人で、そして、非常に沢山の人は農場主としてとてもよい家庭を築いている。

a Sup. John M. Commons, 9 月 10 日、1909 の手紙から抜粋したもの

ウォールトヒルの街中には、オマハ族の 14 家族が住んでいて、60 区画以上がオマハ人の所有である。ロザリエの町には数家族が住んでいる。

(2017.08.08 翻訳完 鈴木)

訳者 あとがき

この本は、**The Omaha Tribe Volume II** で、**Volume I** については、アメリカ滞在中に英語の原本に親しむという目的でその翻訳に挑戦しました。そのご、**Volume II** を手がけましたが、途中で帰国することになり、その後、サウジに勤務していましたので、そのままに放置されていました。サウジから戻り、英語から離れていましたので、再度これに挑戦しようということで、2017 年の 4 月初めから、もう一度翻訳に取り掛かりました。同じ単語を何度も引いたり、知っている単語でも意味が通じないと、もう一度詳しい辞書を引き、調べなおしたり、そうすると、意外と古語としての意味とかでびったりするものがあったり、こんな時にはしてやっつたりの気分でしたが、・・・、とにかく、100 年以上も前に、ネイティブインディアンのことを書いたものですから、古典での英語をいかに読むか、また、インディアンが使った英語の文章の難解さなどもくわわり、こんなことをしながら、1 日 2 ページそこそこのペースでした。そして、ようやく、300 ページを読みきることが出来ました。オマハ族のことが全てのインディアンのことについて説明しているというわけでもありませんが、オマハ族は、現代のアメリカの文明化を一番速く受け入れた部族です。その彼らの歴史と価値観を除いてみることは、アメリカという国の歴史を語る上では、とても重要なことと考えています。これを出来るだけ沢山の人に紹介して、アメリカの歴史の裏に隠されている白人たちの価値観を、インディアンの側から理解して行きたいと思った次第です。